「越境」型カリキュラムの開発と実践による学び続ける主体の育成に関する研究
—2023 年度広島大学附属校園研究推進委員会の取組と各附属校園の研究実践—

山元　隆春（広島大学）・吉田 成章（広島大学）

Developing a Boundary-Crossing Curriculum to Empower Teachers and Students as Learning Agents: Insights from the 2023 Research by the Co-Research Committee at the Hiroshima University and Hiroshima University Schools

Takaharu Yamamoto (Hiroshima University), Nariakira Yoshida (Hiroshima University)

Abstract: This paper presents the findings of a 2023 research conducted by the co-research committee of Hiroshima University in collaboration with Hiroshima University Schools. The study focuses on the development and implementation of a boundary-crossing curriculum aimed at fostering teachers and students/children as active agents in their learning journey. Through an analysis of praxis and research reports from 11 Hiroshima University Schools, the study investigates the concept of “boundary-crossing” and its implications for educational practice. The paper then deliberates on the significance of the “boundary-crossing” curriculum, emphasizing its pedagogical value in facilitating collaboration between schools, subjects, and grade levels. The paper also underscores the need for further pedagogical inquiry into the impact of boundary crossings on students and children.

Key words : boundary-crossing, curriculum research & development, educational praxis in schools

Ⅰ．研究の目的と対象・方法

本研究の目的は,「越境」を視点とした学校カリキュラムの開発と実践に取り組むことで，いかに学び続ける主体の育成を実現することができるのかに論究することである。ここでいう学び続ける主体とは，むろん，学習する幼児・児童・生徒である子どもたちであるとともに，学び続ける教師である大人も含まれる。幼稚園や大学も含む「学校」において学習者は，知識の被伝達者あるいは教育作用の受動的な受け手であるのではなく，他者や世界に働きかける主体であり，読み手であるとともに語り手であるとする主体認識は，ポストモダンの思想形成とともに「教育」に大きなテーマを投げかけている。すなわち，主体的に教える教育者とともに，いかに主体的に学び続ける学習者を育成することになるのか，というテーマである。本研究では，このテーマに迫るために，広島大学附属学校園研究推進委員会で取り組んできた共同研究の成果を踏まえて, 2023 年度の同委員会および各付属校の校内研究の成果に言及しながら,「越境」を視点としたカリキュラム開発と実践の成果と課題に言及する。

広島大学教育学部と附属学校との間には 1970 年代に発刊された『学部・附属学校共同研究機構研究紀要』があり，2000 年の旧教育学部と学校教育学部の統合後も, 広島大学教員と附属学校教員との多様な共同研究の成果が毎年度公にされ，現在に至っている。これは大学学部教員と附属学校教員との連携・協働にもとづいた研究体制であり，各教科担当教員のつながりのなかで多彩な共同研究の蓄積が継続されてきたものである。本研究推進委員会は，そのような活動の下地の上に附属学校間の「連携」による共同研究の可能性を探り,「広島大学附属学校園」としての研究の成果を示すために設置された。

本研究推進委員会は，広島大学の大学学部・研究科所属の研究者・教員と以下に掲げる附属 11 校園の「研究主任」（各附属学校園内でのそれぞれの名称は異なる）とで構成されている。

広島大学附属幼稚園
広島大学附属小学校
広島大学附属中高等学校
広島大学附属東雲小学校・中学校
広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校
広島大学附属福山中学校・高等学校

近年の本研究委員会の『報告書』としては，2012（平成 24）年度から 2015（平成 27）年度にかけて刊行された『社会のグローバル化に対応した初等中等カリキュラムの開発』がある。各附属学校園が追究している研究主題とは別に，附属学校園共通の研究主題を設けて，広島大学附属学校園としての研究の成果を集約することは容易なことではないが，広島大学附属学校園の中期計画である「大学との連携により，地域・日本・世界をリードする人材の育成を目指す初等中等教育カリキュラムの研究開発を行う」ということを設置目的とする本委員会の中核を為す仕事である（表 1 参照)。

表１：広島大学新４期中期目標・中期計画・年度計画における附属学校園の2023-2027年度の年間計画及び評価指標

2023 年度は 3 回にわたる委員会会合をすべてオンライン形式で開催した。第１回（2023.8.4）において，委員会副委員長より，2023 年度の本委員会での共同研究のキーワードとして「越境」が提案され，委員の合意を得，各附属に持ち帰って検討することとした。第 2 回（2023.12.25）で，各附属からの意見を踏まえて，共同研究のテーマを「『越境』型カリキュラムの開発と実践による学び続ける主体の育成の研究」と設定し，これを共通テーマとして各附属学校園の本年度の研究を年度末までに集約することを確認した。そして第３回（2023.3.25）で，上記共通テーマに関連させながら各附属学校園の 2023 年度研究成果の報告を行い，報告書原稿の執筆についての確認をした。

このような経緯で「越境」を共通のテーマとして，各附属学校の実践を蓄積する基盤が形成された。「越境」がどのような事態を指すのかということは，さまざまに想定できるが，「越境」というキーワードは，「社会のグローバル化」への対応がテーマとなった 2010 年代半ばの報告書での提案との関連性をもちながらも，2020 年代からその先につながるカリキュラム開発研究を共同で進める上での共通イメージを表現するアンブレラワード(umbrella word)になるのではないかと考えた。今後共同研究を進めるなかで「越境」という語を用いて研究実践の考察を進めることによって，学びを生み出す成員間の関係性がどういう場で引き起こされるのかを捉えることができるようになり，発見に満ちた学びの条件を導き出せる可能性があると考える。

2023 年度の共同研究では，「越境」という語・概念の定義を確定することは強いて目指さず，アンブレラワードとしてこの語・概念を意識しながら，各附属学校園の研究実践を中心に報告書作成に取り組むこととした。「越境」を視点とした学校カリキュラムの開発と実践に取り組むことで，学び続ける主体の育成をいかに実現することができるのかの究明が，「『越境』型カリキュラムの開発と実践による学び続ける主体の育成の研究」の目指すところである。

その「越境」をどう捉えるかという点について，近年の教育学・社会学の知見を踏まえながら本稿「Ⅱ」で理論的な考察を行い，次に「Ⅲ」で各附属学校園の実践の取り組みを分析・検討する。その論究の過程で，本共同研究が目指している「越境」という語の意味内容を少しずつ明瞭にしていく予定である。そして，附属学校園の研究実践のなかに「越境」型カリキュラムの開発と実践につながる様々な萌芽を見いだしながら，「学び続ける主体」を育てるカリキュラムの輪郭を描き出していきたいと考えている。

なお，おもに本稿「Ⅲ」で分析・検討の対象とした各附属学校園の 2023 年度の研究推進の成果の報告は，『広島大学附属学校研究推進委員会報告書　2023 年度』に掲載されており，広島大学の機関リポジトリに搭載されているので，併せてご覧いただければ幸いである。また，各附属学校園の執筆者とタイトルについては表２に示したとおりである。

表２：各附属校園の報告書原稿執筆者とタイトル

校名	執筆者	タイトル
広島大学附属幼稚園	渡邉拓真・中川順子・森田水加穂・小濱菜津・掛志穂・七木田敦	子どもの主体的なかかわりを　再考する―自分の意志や考えをもって環境にかかわるための保育を考える―
広島大学附属小学校	山中勇夫・坂田行平・芦田桃子・野元祥太郎	〈他者〉を楽しみ続ける子どもの育成　４年次―各種カリキュラムの連動を磨き，学校の教育力を高める―
広島大学附属中・高等学校	橋本三嗣	カリキュラム・マネジメントを志向した学びの価値の創造（１）― STEAM 教育の考えを生かして―
広島大学附属東雲小学校・中学校	伊藤公一・重本優紀	教科等本来の魅力に迫るための教師の資質能力Ⅱ―児童・生徒の変容の見取りを通して―
広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校	中村勝・森清成・広兼睦	越境ある学びをつくるカリキュラム・デザイン −「光輝（かがやき）」の実践研究を通して−
広島大学附属福山中・高等学校	下前弘司	SGH５年間，WWL３＋１年間のとりくみから見えてきた課題探究学習の２つの方向性

Ⅱ．カリキュラムにおける「越境」と「越境」としてのカリキュラム

教育において「越境」という概念は，分野横断や領域横断という一般的な意味合いで用いられてきた一方で，なんらかの制約によって教育学研究・教育実践が一つの領域・分野に限定された状況をブレークスルーする概念として積極的にも用いられてきた。例えば，COVID-19 による移動と接触の制約という全世界に共通する制約的教育状況が，翻って知の越境性や学問研究および教育実践における越境的交流の重要性を逆照射する，といったようにである（コロナと教育を巡る研究・実践の蓄積は数多くあるが，広島大学教育ヴィジョン研究センターで取り組んだ，広島大学教育ヴィジョン研究センター 草原・吉田(2022)の例を継続的・包括的な取組の一例として取り上げておきたい）。

他方で，日本以外の教育学研究および教育実践研究の文脈でも，「越境」にあたる構想と実践は蓄積されてきている。例えば，ジルー（Giroux, H. A.）は”Border Crossings: Cultural workers and the politics of Education“と題して，ポスト植民主義の立場から越境を鍵概念とした文化的な教育実践の創造を提起した（cf. Giroux 1993，なお，批判的教育学者として知られるジルーの「越境の教育学（border pedagogy）」とポストモダニズムとの関係については澤田(2008a, 2008b)などに詳しい）。あるいはエンゲストローム（Engeström, Y.）の活動理論をベースとした拡張的な学習の構想は，学ぶ場を「越境」することで構想される多様な学習モデルへと帰結している。

ここではこうした教育学および教育実践における「越境」への様々な関心を，「越境」型カリキュラムの開発と実践へとつなげるという構想のもと，仮説的に次の三つの視点から整理しておきたい。第一に，「知の越境」としてカリキュラムを取り上げる視点である。第二に，カリキュラムにおける教科・領域横断を越境として取り上げる視点である。第三に，学校カリキュラムを学びの「越境」として構想する視点である。

第一の「知の越境」としてカリキュラムを取り上げる視点とは，「知」の所有者を限定することで，そこから疎外されている者を差別する捉え方の脱却をカリキュラム構想へと落とし込む発想である。2000 年を前後して全 6 巻で編まれた「越境する知」のシリーズでは，次のように記されている。

> 本シリーズにおける知の越境とは，学問分野の越境であるだけでなく，文化や芸術の境界の越境であり，国と国との境界の越境であり，階級，人種，性，世代の境界の越境であり，精神と身体の越境であり，言葉と権力が作動するあらゆる境界の越境を意味している。私たちは，知の越境を，ポストモダンの哲学のように超越的な思考や，場と身体を持たない思考によって遂行しているのではない。一人ひとりが当事者として性の現場に参入し，受苦し引き裂かれる身体の狭間にざわめき胎動する知を，ダイアローグの言語によって掬い上げる実践を試みている。国家や家族や企業や市場や学校や大学という装置に体制化された近代の知の編制を内側から突き崩す挑戦である。　（栗原・小森・佐藤・吉見 2000，ｉ頁。）

知の疎外から学習の疎外状況を描き出し，抑圧の状況を意識化することで解放へと向かう課題提起教育を提起したブラジルの教育学者フレイレ（Freire, P.）は，サンパウロ市のカリキュラム改革の主導概念として「学際性（Interdisziprinary）」を挙げ，知の越境によるカリキュラムにおける越境性の重要性を提起した（佐藤 2017 参照）。こうしたスタンスは，先に取り上げたジルーのような批判的教育学者に共通するスタンスであろう。

この視点から「越境」型カリキュラムの開発と実践を検討する場合には，学校教育実践において取り上げられている「知」そのものがどのような越境性を有しているのか，あるいは子どもたちが提起する学びと育ちの成果に埋め込まれている「知の越境性」をいかに分析・考察しうるかが重要な視点となると思われる。

第二のカリキュラムにおける教科・領域横断を越境として取り上げる視点は，教科・学年を横断するカリキュラムの構想として見ることができる。1990 年代以降のいわゆる「クロス・カリキュラム」の動向をその最たる例として取り上げてみよう。すなわち，イングランドのナショナル・カリキュラムにおいて生徒が総合的に学習できるような手だてとして設定された「各教科をクロスした関連づけ（cross curricular links）」を取り入れたクロス・カリキュラム（cross curriculum）の構想や（例えば，寺西 1998 などを参照），ドイツにおける諸教科横断的授業（Fächerübergreifender Unterricht）とそのカリキュラム構想（例えば，井上 1999 や原田 2005 などを参照），そして日本における 1989 年の生活科の新設と 1998・1999 年の「総合的な学習の時間」の導入などである。

日本における実践的な検討として上辻ら(1999)は，神戸大学発達科学部附属明石中学校を舞台に，「クロス・カリキュラム」をテーマとした 1990 年代の実践を取り上げている。また，コンピテンシー志向のカリキュラム改革の動向を視野にクロス・カリキュラムの動向を整理した中山(2023)は，コンテンツ（内容）とコンピテンシー（資質・能力）との関係の検討の必要性を提起した上で，熊本におけるカリキュラム実践を取り上げた考察を行っている。

ただし，実は「クロス・カリキュラム」という 1990 年代以降の動向のみにとどまらず，コア・カリキュラム運動や地域教育計画運動など，教科・領域・学年を横断したカリキュラムの構想自体は日本においても諸外国においても数多く蓄積されてきている。これらの実践的取組を「越境」型カリキュラムの取組として検討するにはいまだ至っていないが，この第二の視点から「越境」型カリキュラムを検討するにあたっては，学年・教科・領域間の横断・越境がいかにカリキュラム上で構想され実践されているのか，す

なわちカリキュラムにおける「越境」を分析・検討することが重要となると思われる。

第三の学校カリキュラムを学びの「越境」として構想する視点，すなわちカリキュラムそのものを「越境」として捉える視点である。「拡張による学習」を提起したエンゲストローム（エンゲストローム 2020 参照）は，プロセスとしての学習の意義とそれを構成する教育者らのコミュニティー形成の重要性を強調した（エンゲストローム 2018 などを参照）。こうした学校教育にとどまらない「越境」の提起は，「越境型学習（Cross-Boundary Learning）」として，様々な組織における学習の理論と実践が提起されてきている（石山 2018 などを参照）。ここでは，学校といった組織において，教える者と学ぶ者とが協働で学習を進めるプロセスが，国境のようなはっきりとした線として描かれる境（Border）ではなく，線引きがあいまいな境界（Boundary）として捉えられ，それを越えることが学習であると捉えられている点が特徴である。

こうした学習そのものにおける越境性をも視野に入れて，吉田(2023)は，カリキュラムとしての「越境する学び」として次の三つを提起した。すなわち，①学際的な学び（教科・教科書・領域・学級・学年を越えた学び），②自治としての学び（自己と他者との共同的な応答関係の中で立ち上がる集団的自治による学び），③関係認識としての学び（学校と地域・社会との関係，教科と世界との関係，自己と他者との関係といった関係を認識する学び），である（吉田 2023，41 頁）。他方で，教育科学研究会が刊行する『教育』誌では，2023 年 6 月号の特集において「子どもの権利としての遊びと越境」が取り上げられ，幼児期・学齢期の「遊び」との関係において「越境」が取り上げられてもいる。また，日本教育方法学会編の『教育方法 52 新時代の授業研究と学校間連携の新展開』の第Ⅱ部では，「学校を軸とした『越境』の実践の可能性と課題」として，幼児期から大学院段階に至るまでの発達段階において，学校種や学年，そして学校を越えたカリキュラム構想・実践の意義が論究されている。

この第三の視点から「越境」型カリキュラムを検討するにあたっては，学ぶ場（学校）を越えた越境がいかにカリキュラム上で構想され実践されているのか，すなわちカリキュラムそのものがいかに「越境」として構想・実践されているのかを分析・検討することが重要となると思われる。

Ⅲ．各附属校園の研究実践にみる「越境」の教育実践

広島大学附属学校園は，それぞれの研究テーマのもとで，それぞれの校内研究を進めている。それらを包括的に束ねながら，それでも一つの方向性を共有して共同研究を進めていくために設定したのが「越境」というテーマであった。2023 年度の附属学校園研究推進委員会での議論では，「学年の越境」・「教科・領域の越境」・「学校の越境」という三つの越境の場面を共通で設定し，吉田(2023)で設定した三つの越境や，各校が自由に設定する「越境」の捉え方で，まずは実践を蓄積し，その実践を報告することとした。

ここでは，「越境」をテーマとして取り組んだ 2023 年度の各附属校園の研究実践の取組の成果を，各附属校園が執筆した『広島大学附属学校園研究推進委員会報告書　2023 年度』の原稿をもとに分析することとする。その分析結果をまとめたものが，表３である。

表３をみると，各校の校内研究のテーマのもとに，様々な「越境」の取組が実践されていることがわかる。表には反映されていないが，注目しておくべき越境の取組のいくつかに言及したい。

まず，広島大学附属幼稚園が取り組んでいる，一人の子どもに着目した越境実践の分析の視点である。渡邉・中川・森田・小濱・掛・七木田(2024)では，３歳児のＡ男と５歳児のＰ男に着目して，子どもが周りの環境にどのように働きかけ，環境からのリアクションのもとで主体的な遊びを展開しようとしているのかが分析されている。こうした分析は，授業のような大人数の教育・学習場面の分析の際にも，学習者である子ども一人に着目したカリキュラムの「越境」の分析の重要性をも提起しているといえる。

次に，広島大学附属小学校のコンテンツ・コンピテンシーのカリキュラム表のような，カリキュラムの縦と横を明示するカリキュラムの構想と実践という視点である。山中・坂田・芦田・野元(2024)では，コンテンツベースとコンピテンシーベースのカリキュラムの二重性を重ねることで，教える側のカリキュラムの横断性を明示する試みに着手している。さらに，子どもの側から見たカリキュラムの横断性を重視して，「ヒロガル」シートを構想し，各学年・教科の授業実践で取り入れていることも特筆すべきことである。この実践からは，教師だけではなく，子どもにとってのカリキュラムを捉えることの実践的意義とカリキュラム論的可能性が示唆されているといえる。

また，この表３には各附属校園の研究実践のすべてが集約されているわけではないことにも言及しておきたい。各附属校は，学校の HP や『研究紀要』，あるいは各種の研究プロジェクト報告書や大学の研究者等との共同研究の成果の公開などに取り組んでいる。国立大学附属校園の当然の使命ともいえるが，各附属校園は実に多様な研究に取り組み，それぞれを丁寧に報告として仕上げている。その具体としてここでは，附属福山中・高等学校の取組に着目し，次の二点に言及したい。

附属福山中・高等学校の取組において注目すべき一つ目は，「創造」という芸術分野の科目を横断した特別な教科での授業実践が実践されている点である。図１は，2023 年 11 月 24 日（金）に開催された附属福山中・高等学校の第 53 回教育研究会で公開された，藤井惠子教諭による高校２年生「創造Ⅰ（音楽表現分野）」：多様な価値観を認め，論理的表現や創造的表現の社会生活における役割を理解する，の授業場面である。本教科・授業では，「音楽」で取り扱う楽器を，楽器と音楽の「歴史」の視点から学び，実際の音を鑑賞・表現して学習する授業であり，授業者からも社会科：

表３：各附属校園の研究主題と研究アプローチの特徴および「越境」の教育実践

校名	研究主題	研究アプローチ・特色	「越境」実践
広島大学附属幼稚園	子どもの主体的なかかわりを再考する―自分の意志や考えをもって環境にかかわるための保育を考える―	森の幼稚園 複線経路・等至性モデリング（Trajectory Equifinality Modeling：TEM） 保育カンファレンス 各学年３場面の事例	一人の子どもに着目したかかわりの重要性の分析：子どもの遊びにおける「越境」 子どもが進んで環境に関わる姿＝「自治としての学び」 生活や遊びの中で家武行けにゃ知識を度題とした探究＝「関係認識の学び」 日常化している横断的な学び＝「学際的な学び」
広島大学附属小学校	＜他者＞を楽しみ続ける子どもの育成―カリキュラムの連動を図り，学校の教育力を高める―	ユネスコスクール カリキュラム試案（2022年度）の活用 学習者が連動性を見とるためのシート：「ヒロガル」	コンピテンシーとコンテンツのコンピテンシー表 各教科同士の連動 「動的過程」：異なる教科の教員同士が，互いの連動性について考え，語り合う施策と対話への着目
広島大学附属中・高等学校	カリキュラム・マネジメントを志向した学びの価値の創造(1)―STEAM教育の考えを生かして―	SSH（2003年度～） 課題研究教師用指導書「広大メソッド」 STEAM教育	STEAM教育の研究の一環としての教科等横断的な学習の方法論 韓国・タイの学校との共同実践 高校２年数学の国際共同授業研究
広島大学附属東雲小学校・中学校	教科等本来の魅力に迫るための教師の資質能力Ⅱ―児童・生徒の変容の見取りを通して―	複式学級・特別支援学級 教師の資質・能力 授業構想力 授業実践力 授業分析・評価力	教科横断的な教師の資質の視点：「学習のつながり」・「興味関心の喚起」・「志向を深めるための支援」・「供応的な学びを生起させるための支援」・「指導のフィードバック」・「形成的評価」 教科等の本質に向かう授業づくりのプロセスが「越境」の授業構想 小中合同の授業研究・校内研修 異学年学習，学級間交流
広島大学附属三原幼稚園・小学校・中学校	高度に競争的でグローバル化された多様性社会に適応するために求められる，３つの次元「躍動する感性」「レジリエンス」「横断的な知識」の基礎となる資質・能力を育成する幼小中一貫教育カリキュラムの研究開発	研究開発学校指定校（2018年度～） ３つの次元（躍動する完成・レジリエンス・横断的な知識）と７つの資質・能力（系統表） 12年間一貫教育カリキュラム	越境：個人にとってのホームとアウェイの間にある教科を超えること（石山・伊達（2022）の「越境学習」を参考に） 「越境」への恐怖心や不安（子ども） ブレークスル―思考 メタ学習 レジエンス 知の越境（既知から未知へ），教科・領域の越境，校種間の越境，教員間の越境，保護者・地域への越境
広島大学附属福山中・高等学校	当事者意識の涵養とともにある課題探究力の育成	SGH（2018年度～） WWL（2021年度～） IDEC-IS連携プログラム 中等教育学校（2027年度～）	「広大メソッド」に刺激を受けた課題探究 サイエンティスト養成型課題探究 ジャーナリスト養成型課題探究 大学生・大学院生・他校の高校生との交流 高校生国際会議 対話を中心としたWWL課題探究プログラム 地域学習（真庭WWL研修） 教科横断設定教科（創造）

歴史分野での学習内容についてたびたび言及される「越境」の音楽授業実践であった。

図１：「創造Ⅰ」の授業実践の場面
（出典：筆者（吉田）撮影）

附属福山中・高等学校の取組において注目すべき二つ目は，WWL の実践を軸とした各教科の授業の質向上のために,「越境」をテーマとした公開研究会での議論を踏まえて，その検討の成果を公開している点である。広島大学附属福山中・高等学校編(2024)にその取組の概要がとりあげられているが,「公開研究会から見る今後の課題と改善点」の中では，公開研究会への参加者の声として，「『越境』というキーワードもとても興味深かったです。実際に働いていて，教員自身が『越境』することに対して及び腰な面が大きくあるなと感じる場面があります。どうすれば教員が『越境』することが容易になるでしょうか。」などが取り上げられた上で，「『越境』と教科横断はどう違うのか，個別最適な学びおよび協働的な学びをどうとらえ，そのつながりをどう考えそれぞれをいかに具体化するかについては，まだまだ検討が不十分であるように思う。WWL の取り組みとして，個別最適な学びと協働的な学びが同時に実現するような教育プログラムを複数開発しているが，その意義や効果等について丁寧な検討と情報発信が必要である」(広島大学附属福山中・高等学校編 2024，20 頁）とも指摘されている。この実践の取組の成果の振り返りからは,「越境」という概念のもつ実践への刺激性だけではなく,「越境」という言葉を安易に使うのではなく，また逆に厳密な定義に実践が縛られてしまうのではなく，実現したいと願っているカリキュラムと学習の具体的な姿から，その内実を理論的・実証的かつ実践的に探究していくことの重要性が提起されているといえよう。

Ⅳ．今後の展望と課題

以上の考察を踏まえて，本共同研究の成果と今後の可能性と課題について，以下の三点から言及したい。

第一に，「越境」という包括的な視点･テーマで附属校園全体で共通に取り組む課題を設定したことの意義である。「越境」というテーマは，包括的で網羅的であり，その定義を定めることが難しいという課題がある一方で，逆に，その定義を狭めずに各学校の自由裁量のもとで研究実践に取り組めるという利点がある。学習指導要領という教育課程編成のための大綱的な基準のもとでスタンダード化される学校カリキュラムという潜在的課題を克服しながら，各附属校の自由で創造的な教育実践の取組が公開されることは，国立大学附属校の存在意義を他の私立・公立の学校へも波及させることへとつなげていく可能性を有している。他方で，その用語の定義の包括性が，実践の構想および分析の視点の不安定さをもたらしかねないことが危惧される。この課題については，広島大学附属学校園研究推進委員会でも取り上げながら，理論的かつ実践的にその意義と課題を検討していくとともに，学会発表や論文執筆など，積極的に学界へと発信していくことで，批判的な応答にもとづく理論と実践の発展を期したい。

第二に，当初想定した「学年の越境」・「教科・領域の越境」・「学校の越境」という視点にとどまらない多様な「越境」のカリキュラムと実践が提起されたことの意義である。すでに分析してきたように，各附属校園はそれぞれに「越境」を定義し，実践を意味づけ，その意義と課題を提起している。他方でこのことは,「越境」型カリキュラムを学校カリキュラムにのみ限定してとらえてしまう矮小なカリキュラム観への警鐘とも捉えることができよう。すなわち，附属東雲小・中学校の取組で報告されたとおり，保護者や地域での越境の場面や，附属福山中・高等学校の取組のような学校間および学校を越えた地域・世界での実践が越境の場面として想定される。したがって，学校カリキュラムとして「越境」型カリキュラムを構想しつつも，実践としては「学校」という制度的枠組みを越えていくことに留意していくことの意義と課題が提起されているといえる。

第三に，学校種を越えた「越境」型カリキュラムの具体を提起したことの意義である。広島大学の附属校園は，附属幼稚園と附属小学校を除いて，すべての学校種が併設・連携型である。また，附属幼稚園も附属三原幼稚園と，附属小学校も同敷地内にある附属中・高等学校との日常的な連携が学校運営上の基底にある。幼稚園から高等学校まで，さらに附属福山中・高等学校のような大学 AP を活用した大学との連携のように，学校種を越えた「越境」型カリキュラムは，子どもたちに多様な学びの機会と場を提供する意義がある。また，公開研究会などの取組を通じて，附属校園と他の学校との間の越境がなされていることも重要である。他方で,「越境」という用語の包括性がマジックワード化し,また自己目的化しないように留意する必要がある。すなわち，何をしても「越境」となるという実践の捉え方では，実践の貧困とそこから翻って理論の貧困に帰結することになるだろう。また，とにもかくにも子どもたちに「越境」の経験をさせればよいということにいたるのであれば，それは「越境」の過度な目的化あるいは実践の目的を見失った単なる手段化に堕してしまうであろう。附属小学校が子どもたちが自分たち自身のカリキュラムをどう見つめさせるのかに重点を置いたように,「越境」型カリキュラムが子どもにとってどんな意味があるのか，それを子どもとともに探究していくことが今後の重要な課題である。

付記

本稿は 2023 年度に 3 回開催された広島大学附属学校園研究推進委員会での共同討議，および筆者らによる共同検討に基づいて執筆したが，執筆の分担を記せばⅠを山元が，Ⅱ・Ⅲ・Ⅳを吉田が執筆した。

参考文献

Giroux, H. A.(1993). *Border Crossings: cultural workers and the politics of education*, Routledge, New York and London.

石山恒貴(2018)『越境的学習のメカニズム―実践共同体を往還しキャリア構築するナレッジ・ブローカーの実像―』福村出版。

石山恒貴・伊達洋駆(2022)『越境学習入門―組織を強くする「冒険人材」の育て方―』日本能率協会マネジメントセンター。

井上静香(1999)「ベルリンにおける環境教育プロジェクト『学校の環境教育』に関する一考察―ドイツにおける環境教育の教科横断的授業の一例として―」日本カリキュラム学会編『カリキュラム研究』第 8 号，117-130 頁。

上辻由紀子・野上智行・稲垣成哲・山口悦司(1999)「クロス・カリキュラムの構想と運営に求められる諸要件―神戸大学発達科学部附属明石中学校を事例として―」日本科学教育学会編『科学教育研究』第 23 巻第 1 号，25-32 頁。

ユーリア・エンゲストローム著，山住勝広監訳(2018)『拡張的学習の挑戦と可能性―いまだここにないものを学ぶ―』新曜社。

ユーリア・エンゲストローム著，山住勝広訳(2020)『拡張による学習　完訳増補版―発達研究への活動理論からのアプローチ―』新曜社。

栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉(2000)「『越境する知』への誘い」同編栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉編(2000a)『越境する知１　身体：よみがえる』東京大学出版会，ⅰ-ⅱ頁。

栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉編(2000a)『越境する知１　身体：よみがえる』東京大学出版会。

栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉編(2000b)『越境する知２　語り：つむぎだす』東京大学出版会。

栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉編(2000c)『越境する知３　言説：切り裂く』東京大学出版会。

栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉編(2000d)『越境する知４　装置：壊し築く』東京大学出版会。

栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉編(2001a)『越境する知５　文化の市場：交通する』東京大学出版会。

栗原彬・小森陽一・佐藤学・吉見俊哉編(2001b)『越境する知６　知の植民地：越境する』東京大学出版会。

佐藤雄一郎(2017)「P.フレイレの『解放』の教育思想と『課題提起教育』の今日的意義」日本教育方法学会編『教育方法学研究』第 41 巻，49-59 頁。

澤田稔(2008a)「アメリカ合衆国における批判的教育研究の諸相（１）―ヘンリー・ジルーの教育論に関する批判的再検討（上）」『名古屋女子大学紀要 人文・社会編 』第 54 巻，57-70 頁。

澤田稔(2008b)「アメリカ合衆国における批判的教育研究の諸相（１）―ヘンリー・ジルーの教育論に関する批判的再検討（下）」『名古屋女子大学紀要 人文・社会編 』第 54 巻，71-80 頁。

寺西和子(1998)「イギリスの『クロスカリキュラム』の検討--その社会的性格と構成論から」『愛知教育大学研究報告　教育科学編』第 47 巻，21-29 頁。

中山玄三(2023)「クロス・カリキュラムの歴史的流れと今日的課題―汎用的な資質・能力の育成をめざして―」『熊本大学教育学部紀要』第 72 巻，265-270 頁。

原田信之(2005)「統合教科『事実教授』と『諸教科横断的授業』のカリキュラム改訂―バーデン・ヴュルテンベルク州の 84 年版基礎学校学習指導要領の検討―」『岐阜大学教育学部研究報告　教育実践研究』第 7 巻, 225-244 頁。

広島大学教育ヴィジョン研究センター 草原和博・吉田成章編著（2022）『教育の未来デザイン―「コロナ」からこれからの教育を考える―』溪水社。

広島大学附属福山中・高等学校編(2024)『中等教育研究紀要』第 64 巻。
https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/55181/files/48150

山中勇夫・坂田行平・芦田桃子・野元祥太郎(2024)「＜他者＞を楽しみ続ける子どもの育成　4 年次―各種カリキュラムの連動を磨き，学校の教育力を高める―」広島大学附属学校園研究推進委員会編『広島大学附属学校園研究推進委員会報告書　2023 年度』。

吉田成章(2023)「授業研究を軸とした学校におけるカリキュラム研究―＜他者＞を楽しむ子どものメタ認知から知の＜越境＞による主体の育成へ―」広島大学附属小学校学校教育研究会編『学校教育』No.1268，38-43 頁。

渡邉拓真・中川順子・森田水加穂・小濱奈津・掛志穂・七木田敦(2024)「子どもの主体的な関わりを再考する―自分の意思や考えをもって環境にかかわるための保育を考える―」広島大学附属学校園研究推進委員会編『広島大学附属学校園研究推進委員会報告書　2023 年度』。